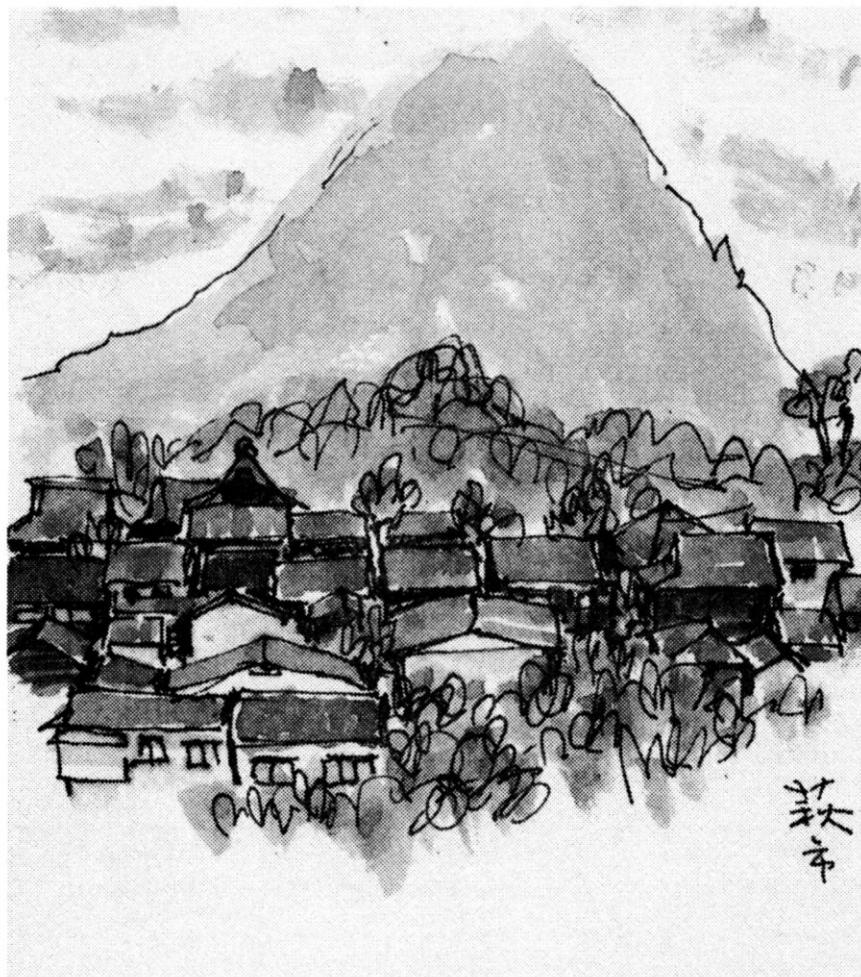




『萩市』



永原 誠 画

東 南 口 分 遣 隊 堀江 保次
○三年夏のバンクーバー紀行 小田切明徳

総会記念講演要旨（下）
マス・メデイアによりつくられた世界像
—北朝鮮・イラクの危機そしてパクス・
アメリカー危機について— 田北 亮介
編集後記

東口南分遣隊

堀江 保次

この戦争は勝目はないぞ…

こんな事で戦争に勝てる訳はない
と古兵達が集まるとその話で持ち
切りである。

昭和一九年七月〇日、負け戦の
話の多い中で、「第三分隊長 堀江
保次、明〇日付を以て東口南分遣
隊長を命ずる。依つて明朝二時出発、
第三分隊は同地点迄警護行動を共
にして任務終了後直ちに帰隊する
こと。敵情良好ではない厳重に警
戒し、任務の支障なきようにしてよ。」
大隊本部は曲陽県に位置し我が
中隊は最前線靈山鎮に警備駐屯し、
八路軍と十九路軍の根拠地と迄い
われ、一步も外に出る事は出来な
い籠城警備である。東口南分遣隊
も同様孤立無援の中にある。

有線無線連絡網なし。
分遣隊員長以下十三名、装備は
チエッコ式軽機関銃ノ以外三八式
歩兵銃、弾薬各人、百二十発軽機
補充用の弾薬五百発程度。
敵襲の場合は死守以外にない。

給養については乾燥野菜のみ、
周辺の部落の治安工作はゼロで、
中国人の姿は先ず見ない。敵のど
真中に位置する分遣隊と言つても

過言ではない。

又大隊本部と中隊本部との連絡
は月に一回くらいある。その連絡
拠点で命綱の地点であり、重要地
点でもある。地雷埋設が多く、周
囲は剣山の如き峰が連なり、監視
兵が峰に姿を見せてる。陥路剣
山地域である。

分遣隊員は入浴はなし、髪は伸
び放題、洗濯も満足にする事が出
来ない。自分が着任して一日目、
初年兵のAが「隊長殿洗面の水を
持つてきました。洗面が終わりま
したらその水を捨てないでください。
あとで五、六人は顔を洗いますから。」

「全員配備につけ——。」

「軽機は山の峰、周辺の部落を撃
ちまくれば、小銃はありたけの弾を
使つて撃ちまくれ。」と命令をした。
近くで数個の地雷の爆破の音、隊
員配備位置を廻り、「夜明けは近い。
夜明けまで警戒怠るな、敵が中に
入つてきたら終りだぞう。」

修羅場とか硝煙弾雨の中とは、
あの襲撃の事を言うのかも知れな
いと今でも思い出すことが多い。
幸いにして大陸の夜明は早く、付
近がしらみ始めた。その頃に敵の
主力は撤退したのか戦いの跡形は

終る。着任してより月日は過ぎて、
八月の初旬と記憶はしている。詳
しい情報は知る由もないが周辺の
山の峰を肉眼で見る限り、監視兵
が多いのが目立ち敵の動きの激し
さが読み取れる。全員、何れも興奮
た情報を話し厳重に警戒の旨を伝え、
出来るだけ明るい時は休み、夜は
起きて警戒しようと頼りなる五年
兵や三年兵C兵長に任務分担をし、
自分はトーチカの展望台に歩哨と
共に夜は定位置として警戒に強めた。
それから数日後午前三時ごろ発
煙筒らしきものが花火のような音
を立て、白い煙が山上に舞い上が
った。何かの敵の合図には違いない
と思つたが考へる間もなく、天
地も割れんばかり迫撃砲と手榴弾
の炸裂、黎明を期しての分遣隊へ
の集中攻撃だ。

「全員配備につけ——。」
「軽機は山の峰、周辺の部落を撃
ちまくれば、小銃はありたけの弾を
使つて撃ちまくれ。」と命令をした。
近くで数個の地雷の爆破の音、隊
員配備位置を廻り、「夜明けは近い。
夜明けまで警戒怠るな、敵が中に
入つてきたら終りだぞう。」
「寸待て、周囲の状況を暫し見て
から判断をするから。」「早く取
り除かないとあの繩を引っ張られ
たら終りです、早く取り除きまし
よう。」「確実に、引き地雷だから、
繩に注意しないとなあ。」「繩は
この鎌で切斷します。」というなり、
C兵長は越中褲だけの丸裸になり、
トーチカの入り口の扉のカンヌキ

何処にと思うような静寂さになり、
周囲の山の峰に監視兵を見るのみ
になった。我に返り大声で警戒兵
だけ残して、全員に集合かけ「異
常はないか」、隊員の異常なしの声
にほつとする。全員、何れも興奮
ラさせている。長の自分はそれ以
上であったであろう。猛烈な夜襲
に一人の犠牲も出ず、共に生き延
びた喜びを嘆みしめていると、展
望台の歩哨が大声で「トーチカの
下にでっかい地雷があるぞーーー。」
「なにー」と、展望台に急ぎ上がり
てみると地雷に間違いない、箱
地雷である。それに繩が引っ張ら
れている。引き地雷だ。敵はこの
地雷でトーチカを吹っ飛ばして全
滅作戦に出てきたのだ。一難去つ
て又一難、この地雷をどうして取
り除くか。幸いにして、敵の作戦
は失敗に終り全滅を逃れることは
出来たが、次の地雷の処置方法に
全員興奮気味のなかの沈黙である。
その時、三年兵のC兵長が「班長
殿自分が地雷を取り除いてきます。」
「寸待て、周囲の状況を暫し見て
から判断をするから。」「早く取
り除かないとあの繩を引っ張られ
たら終りです、早く取り除きまし
よう。」「確実に、引き地雷だから、
繩に注意しないとなあ。」「繩は
この鎌で切斷します。」というなり、
C兵長は越中裤だけの丸裸になり、
トーチカの入り口の扉のカンヌキ

をはずして、外に飛び出した。

「よーし、全員聞けーー、C兵長が地雷を処理するまで警戒の位置につけ、軽機は監視兵の多い前面の山の峰に向ける、敵が撃つたら応戦せよ。」飛び出した兵長は素早く縄を切断、地雷を抱えて中に入ってきた。C兵長は全身に油汗をかいている、息づかい荒い決死の行動だった。このC兵長の勇断が地雷を爆破させることなく、危機をまぬがれた。隊員達はスゲ工地雷だ、爆破が成功していたら全滅だつたなあーー。

C兵長の勇断と夜襲を死守の一念で攻防した隊員たち、この中国河北省の奥深い山中で敗戦となり、引き揚げ地点迄戦いの渦中を乗り越えて東口南分遣隊員全員復員帰還したが、あれから五十有余年今は隊員諸氏は音信不通の状態である。現在生存しているのは自分ひとりだけかもしれないと思つたりしているこの頃である。戦後の五十年余年を経る中で生き長らえ復員した戦友の訃報も多い、共に戦死された戦友たちの冥福を祈り、今生き延びている者の使命を果たしたいきたいと念願している。

（追記）

分遣隊が敵の攻撃を受けてから数日後のことである。東方の山の峰より一個小隊くらいの隊列を組ん

だ集団が山を下りてきた。

「スワーー」、またしても敵の襲撃だと思い「全員配備につけ！敵の襲撃だぞ！」と命令するが、同時に日の丸の旗を高く振っている。「日本軍だぞ！オーケー！」と声を掛け本軍だぞ！と声を掛けてくる。やれやれと胸をなでおろした。

「日本軍だ！撃つな！」と言つて近寄つてくる。自分は早速トーチカの外に出て隊を迎えた中隊長らしき中尉殿に捧銃の敬礼をして「○部隊の○○中隊の東口南分遣隊長の堀江であります」と挨拶する

と「○○部隊の○○中尉である。警備行軍と討伐を兼ねての行動である。分遣隊勤務ご苦労である。一つ頼みがあつて分遣隊に寄り道をした。兵隊が一人地雷にかかり重傷だ。二日後には必ず帰つてくれる」。

○○中尉の隊員達は暑さと疲れが激しい様子でその姿は敗残兵でも見ているようであった。それに地雷にかかる負傷兵を見て、その恐怖心があつたかも知れない。

○○中尉は自分のよう下つ端下士官に頭を下げてよろしく頼むと敬札をして出発した。自分は捧銃の敬礼をして見送った。

負傷した兵の階級は兵長で、付添兵は応召補充の一等兵であつた。負傷兵の意識はしつかりしていた。

が絶えず強烈な痛みを発していた。

自分の手を握り「分遣隊長。分遣隊長」と叫ぶ。「しつかりせい。」と命じるが、同時に日本の命介抱しましたがこの通りであります」自分は事の詳細を話し、死んだ兵長の片腕を差ないかも知れないと思つた。以前からの戦友の如く自分の名前を呼ぶ。夜が白みかけた頃、兵長は自分の手を握りその命を絶えた。

分遣隊員の一人が湯かんしましき中尉殿に捧銃の敬礼をして「○部隊の○○中隊の東口南分遣隊長の堀江であります」と挨拶する

と「ありがとう」を繰り返し、次の作戦行動に出発した。

十三名の分遣隊員が整列し、「頭右」の号令で捧銃して兵長の片腕と中隊を見送った。
（日付・名前）
（ほりえ やすじ 峰山町在住）

腕を切り落とさせ土葬した。

一日が過ぎ、○○中尉の部隊が分遣隊に立ち寄つた。「中尉殿、自分達は一生懸命介抱しましたがこの通りであります」自分は事の詳細を話し、死んだ兵長の片腕を差し出した。○○中尉は「分遣隊長の通りであります」と感謝の言葉を述べ、隊員全員がその手を握りその命を絶えた。

亡くなつた兵長は分隊長であつた。自分は付添の兵と二人で分遣隊長室で死体を見守つた。

その頃、中隊本部が敵襲の情報を耳にしたとの事で中隊長が連絡に見えた。敵襲の状態、更に負傷兵を預かつた事を申告した。中隊長の言葉は「油断するな」の一言であった。

死んだ負傷兵は、季節が夏であり、体中が腐乱状態でその臭いはきつかった。死体の処置は衛生兵に片

○三年夏のバンクーバー紀行

小田切 明徳

この夏、バンクーバーへ六回目の旅をしました。一〇日間は抜け旅です。山宣さんの足取りをこのような晴天で、持参の折りたたみ傘は無用でした。若者向きの評

伝（物語）完成を目指しての一人旅です。山宣さんの足取りをこの目でしつかりと見て、この足でじっくり歩く。山本宣治全集第六巻

：217～465頁のカナダ時代の日記部分を切り取り、記載されたアレコレを確かめようとした。荷物は紛失物のないよう二つ。中型のザックと小型のショルダー バックと一人旅のため極力軽装にする。衣類を始め、無駄がないようにと、大切な全集をもカッターナイフで必要部分を取り取ったのです。準備には二ヶ月前から臨みました。経費節減を目指し、エアー・チケット、ホテル代も自前でEメール、FAXをフル活用しました。

山宣研究の第一人者である佐々木敏二さんのアドバイスを始め、ゴードン門田さん、日本語学校・元理事長の八木慶男先生らのご助言をもとにした以下の日程でした。

七月二二日、お馴染みになつたパンクーバー空港の出口で、すぐにタクシーを拾う。ステープストン・ホテル手前で、インド人のドライバーにチップコムの25\$を渡す。

昼一時前にチエツクイン。部屋でカメラ、地図を用意して、帽子、半ズボンの姿となる。

ステープストン・ホテルは、モンクトン通り・3アベニューの角にある。その南側に三尾村からきた漁者団体事務所があつたと言う。このあたりは、今は舗装のモンクトン通りは木道であつたはずだが、この路を山宣さんが何度も通つた所だ。すぐ西側に当時のキャナリーオの姿を残すジョージア・キャナリーオを出でる。

この日は休館でお茶を飲めずにがっくりした。ここまで来るとステー

リ博物館がある。ここは前回にも訪れた。今回は、じっくり見て、館内の若い案内者に、鮑の種類についての質問もした。ここでキヤナリーの変遷を記した本"STEVESTON-Waterfront"を手に入れた。

こりを出てフレーザー河に沿つて、上流を目指してひたすら歩いた。フレーザー河の対岸に細長い無人の島のシャデー島（ステーヴストン島）が並行している。この島が街並に近いのでフレーザー河は幅が狭い印象をもつが、この辺りの河口は2Km以上あるはずだ。現在の埠頭にはヨットなどの持ち舟が繋がつて、いまのこの地は、鮑獲りより観光名所となつていて感じだ。ブリタニアン・キヤナリが保存された地域までその歩道が続き、川沿いには分譲したばかりのコンドミニアムが幾つも建つてゐる。

フレーザー河に突き出たブリタニアン・キヤナリは廃屋となり、この一帯は歴史文化の学習基地となつていて。その一角のムラカミ・ハウスに立寄ると中に、一九七四年の訪問時にお会いした林林太郎さんの写真が飾られていた。排日運動の激化で日系人の所有する船は全部集められて没収された記録をした写真である。

ロンドン記念農園まで歩くが、この日は休館でお茶を飲めずにがっくりした。ここまで来るとステー

リ博物館がある。ここは前回にも訪れた。今回は、じっくり見て、館内の若い案内者に、鮑の種類についての質問もした。ここでキヤナリーの変遷を記した本"STEVESTON-Waterfront"を手に入れた。

こりを出てフレーザー河に沿つて、上流を目指してひたすら歩いた。フレーザー河の対岸に細長い無人の島のシャデー島（ステーヴストン島）が並行している。この島が街並に近いのでフレーザー河は幅が狭い印象をもつが、この辺りの河口は2Km以上あるはずだ。現在の埠頭にはヨットなどの持ち舟が繋がつて、いまのこの地は、鮑獲りより観光名所となつていて感じだ。ブリタニアン・キヤナリが保存された地域までその歩道が続き、川沿いには分譲したばかりのコンドミニアムが幾つも建つてゐる。

フレーザー河に突き出たブリタニアン・キヤナリは廃屋となり、この一帯は歴史文化の学習基地となつていて。その一角のムラカミ・ハウスに立寄ると中に、一九七四年の訪問時にお会いした林林太郎さんの写真が飾られていた。排日運動の激化で日系人の所有する船は全部集められて没収された記録をした写真である。

私はUBCの宿舎に二六日まで四泊した。佐々木さんの紹介での活動にボランティアで協力されていました。山宣のエア・チケットと併せて旅費の経費削減作戦の一環となつた。

初めてのパンクーバーに来た時、北パンクーバー（北晩）の石原さんのお宅に伺つた。その時、キヤピラノ峡谷・つり橋に連れて行って頂いたが、今回の目的は山宣が日記にある地名「ガンガラ沖まで漁に出かけたそうですが、どのへンですか」「聞いたことがあるな」「やーやー、ジョージア湾の方だ」、と日記では分からぬ所を教えていた。

私はUBC（ブリティッシュ・コロンビア大学）に移動すると、服部さんがあつた。北晩のターミナルで、キヤピラノ行きを探した。バス乗り場で慌てて頂いたが、今回的目的は山宣が日本庭園を目指した跡地の確認に出かけた。UBCから④のバスで出かけ、シーバスに乗り継いで、北晩のターミナルで、キヤピラノ行きを探した。バス乗り場で慌てて頂いたが、今回的目的は山宣が日本庭園を目指した跡地の確認に出かけた。UBCから④のバスで

はキャピラノ大学行きであった。こうして一時間ほどのロスタイルム。仕方なく元に戻って、今度はグラウス山行きに乗り、つり橋にたり着いた。山宣が日本庭園にと開墾した土地と数キロぐらい離れた所だろうか。山宣らは二〇〇三〇〇尺の大木の茂る未開の地で開墾をした。この原風景を確かめようここにきたわけ。吊橋は二、三度見ているので、そこは一回りして出ると、そこから、誰も歩いてはない道を上流にそつて辿り、高木、中層、下草を見ながら鮭の孵化場・展示場まで歩く。

その午後、ジヨウジア AV. 21 St. の地点、山宣の日本庭園つくりの地点だ、ここを目指した。ここからの風景を山宣は鎌木五郎牧師と眺めて、神戸の街並を想起していた。海岸から6 St.までは急な坂道、何故か 9 St. はない。ここから一時の方角に道が曲がると、すこし平坦になり緩やかなスロープが続く高級住宅街である。やがて見えた 21 St. には住宅があり、庭園らしき面影はない。周囲の建物のため下の海も見えない。もう一〇〇年にもなる昔のことだ。僕らの住んでる桃山でも風景は激変しているのだから、そこも変って当たり前だ。

七月二五日約束してあつた日本語学校とその周辺の日本人街（パウエル街）、ストラスコナ小学校、ブリタニアン高校に向う。既に九時数分前、日本語学校に向う。白昼の街頭、数人（女一人を含む）の麻薬患者の注射の回し打ち現場に遭遇した。角を回って、日本語学校は厳重なロック常態、校長の吉永先生をインターフォーンで呼び出し、二階の校長室にお邪魔した。三〇台の女性校長、山宣のレクチヤーをした後、学校の案内、屋上からの周辺の風景を見せて頂いた。カリネギー記念館にも立寄るつに避けた。二人組のオマワリが回観している。

先に、山宣の通学路を辿ることにした。ストラスコナ小学校を経て、バスでこの地に來たので、距離感はなかつた。歩く事で、「日記の記載」が頭に浮ぶ。中国人、ロシ亞人の住宅地があり、ブリタニアン高校に向うあたりに大きな食品工場などがあつた。

日本語学校へは午後一時のアボットとつてあつたので、時間調整のためパウエル広場のベンチに座つた。ゲームボールの試合をしていた一群が昼飯に出かけて、帰るまで數十分、天気もよいので地図や資料を広げて過ごす。ベンチの後ろには仏教會館があるが、ここはかつてのキリスト教会。山宣らが出入りした所だ。ゲームボールを楽しんでいたのは、この仏教徒二世のメンバーである事が、挨拶を交わしてわかった。

翌日は、J. 石原さんの墓参りをした。UBCの宿舎前に車でお迎えにきていただいたのは、ゴードン門田さん。バンクーバーで一番古いといわれる墓地であつた。フレーザー通り・33番の角地に向う。広びろとした芝生の墓地、日本のそれはなんとなく陰氣だが、その暗さがない。道に面した所と聞いて、探したが見つからず、もしやと思ひそのフレーザー通りの反対側を探す。

「昔は土葬でしたから、一区画が大きいのです」。あまり石塔はない、芝生の中に亡くなつた方のブレントが目印。写真や日記に、石原明之助さん幼女が亡くなつた時の大きな葬儀の様子が残つてゐる。「まるでピクニックにきたようです」と、翌春 Mrs. 石原と墓地を訪ねた時の山宣の記録がある。

「へ、ロシ亞人の墓標だ」と見入つた次に、ISHIWARA の文字が

私の目に飛び込んできた。「門田さん、ありましたよ」と大声をあげる。

明之助さんの下に、J. 晓さんと名前も確認できた。今回の旅のハイライトである。

七四年訪問時の J. 石原さんの面影を門田さんの姿にダブルさせてしまつた。日本とカナダとの友好の行事を幾つも手がけ、七月月中旬にライブで放映された「NHK素人のど自慢パンクーバー大会」の実行委員長をされたと言う門田さんも、J. 石原さんとともに白髪の日系二世。

この後、NIKEI 会館、「隣組」にもご案内して頂いたが、行く先々でゴードンさんからの掛け声で、振り返る笑顔がじつに多かつた。パウエル街は荒れ果てた街となり、日系人の交流の場はそこからこの二つの「日加友好交流の拠点」に移つていた。ここは明るく多くの人々の憩い場となつていた。

「隣組」では、八月初めパウエル祭での出し物の舞台稽古中で、若者のセリフが響いていた。

七月二七・二八日はカナデアン・ロックキー鉄道の旅を予約してある。朝七時出発だが、ガイドブックでは「一時間前集合」を勧めてあり、UBCからタクシーで飛ばしたため、早く着き大分待つた。結局、列車が出発したのは八時前。

車窓からのヘーラー河がしだりしてわかった。

車窓からのヘーラー河がしだりしてわかった。

車窓からのヘーラー河がしだりしてわかった。

がら、夏休みにモントリオールまでのポーターのアルバイトをした山宣の旅行記を思い出す。当時は、CPR（カナダ太平洋横断鉄道）である。ここを安い労賃で働く日本人と中国人が動員されたわけだ。

いまもその線路を貨物列車が通る。百輌以上も連なったC.Pと書かれた貨車が対岸をカムループスに向う。

その日はカムループスで宿泊。夕食は泊つた宿に面する日本食レストランに出かけた。握りの手先がなかなか上手な青い目の板前さん。どこで修業したのかの英語の問い合わせ、静岡で二年間、江戸前寿司を習つたと日本語で返事があつた。この地を訪れた初めての日本人だと歓待された。チラシ寿司を注文して、「日本の卵焼きが散してあるよ」と言つたら、井に卵焼きのサービスが来た。

二日目、列車はキヤナデアン・ロッキーを間近に見て、ゴールデンなど旧鉱山で栄えた街を通過してバンフへ。バンフはこれまでに二回行つた事があり、翌日のフライも考慮して宿はカルガリーにした。前のキヤナデアン・ロッキーはバスの旅であつたが、列車の旅はお勧めだ。隣にトロントからきた二人の娘さんをつれた家族連れと交流しながら旅は有意義だった。車内のガイドの早口での説明の大部分はキーワードしかキャッチできない。ジョークを飛ばすのは、

皆が笑うのでそれだと分かるだけ。山宣の旅行記に出てくる「三姉妹峰」は今回も美しく見えた。カルガリーカーへの到着は二時間以上遅れて、着いたのは真夜中であった。

二九日は、カルガリーからビクトリアへのフライト。ビクトリア空港からのダウタウンへのシャトルバスの乗客は私一人、タクシに乗つたと同じ気持。博物館と周辺は相変わらず美しい。今回は、博物館をじっくり見た。

翌朝、八木先生から教えられた記念碑を建立するために尽力され、この地・ロスベイに行きたくなつた。ここを終焉とした名も無い人々の合同埋葬されたことを忘れまじと。ロスベイまでの行き返りには時間が残つていなくて、この訪問は別の機会とした。代わりに海洋博物館をじっくり見学して、正午のバンクーバー行きのフェリー・バスに乗つた。

バンクーバーのバス・ターミナルは、前述した列車の駅と同じ所であった。ターミナルへの途中、エリザベス公園、市役所そしてウイスラーの正月スキーに来た時に、バスケットボール狂いの我がキックの要求で見にきたブレイス球場などのバンクーバーの市内の主な所がようやく頭に収まつた次第。

その日は花火のある夜だった。見学の客の列がロブソン通りをイ
ングリッシュ・ベイに向うのが途
切れる事がなかつた。一〇時から始まつた花火は九階の宿舎の窓からは1/3しか見えなかつた。

(おたぎり あきのり
伏見区在住)



マス・メディアによりつくられた世界像 — 北朝鮮・イラクの危機そして パクス・アメリカーナ危機について — (下) 〔京都の科学者〕(一四九号、二〇〇三・五・一〇より転載) 田北 亮介

三・イラク危機について

アメリカはフセインをヒットラーになぞらえながら、戦争プロパガンダを本格化させ、世界に広げています。ボスニア・ヘルツェゴビナの場合も、コソボの場合も、また湾岸戦争時のイラクの場合も、世界第二の石油資源とアメリカの強力な支援を背景にして、中東アラブ地域における覇権国家の道を目指していたのです。アメリカは、一九七九年のホメイニ革命のイラクを「イスラム原理主義国家」と同様の正当性をアメリカは掌中におさめているでしょうか。世界論の同意を調達しているのでしょうか。疑わしいかぎりです。そこでここでは、まず今日のイラクをとりまく状況について、一二年前の湾岸戦争当时と比較しながら

考へてみようと思ひます。

一二年前のフセインのイラクは、世界第二の石油資源とアメリカの強力な支援を背景にして、中東アラブ地域における覇権国家の道を目指していたのです。アメリカは、一九七九年のホメイニ革命のイラクを「イスラム原理主義国家」と同様の正当性をアーラブ国王のイランに代えて、して敵視し、それに対抗する国としてイラクを位置づけたのです。ある意味では親米同盟の旗頭である意味では親米同盟の旗頭でありました。しかし今日、過去と同様の正当性をアーラブは掌中におさめているでしょうか。世界論の同意を調達しているのでしょうか。疑わしいかぎりです。そこでここでは、まず今日のイラクをとりまく状況について、一二年前の湾岸戦争当时と比較しながら

148号 正誤

2ページ 第三連	2ページ 「五六年以前」↓ 「五八年以前」
2ページ 第八連	2ページ 「九七年七月発行の」↓ 「九七年七月発行の」
6ページ 2段 28行	6ページ 「ボータレス」↓ 「ボーダレス」
7ページ 4段 3行	7ページ 「六月や」↓ 「六月の」
(以上 須田稔氏の御指摘による)	

米イラク国交正常化へとすすみました。この正常化は、一九六七年の第三次中東戦争時の断絶以来のものであります。

アメリカのフセイン支援はその後も軍事を含めて強められ、フセインの化学兵器による国内クルド民族への大弾圧にたいして、国際的に経済制裁が提起された場合も、それに加わることを避けたほどでした。一九九〇年の七月には、とくに注目すべき事例としてアメリカ大使グラスビーとフセインによるイラク再建の努力を評価し、アラブ内閣問題にアメリカは干渉しない」と公式政策を説明しました。この内容で、翌七月二八日フセイン宛

ブッシュ大統領文書が手渡されていました。その四日後に、フセインによるクエート侵攻が始まつたのです。そしてクエート併合宣言がだされました。歴史は奇奇怪怪です。

この事態に直面して、アメリカは対イラク攻撃を準備し始め、「砂漠の嵐」作戦のもとに海空軍と中國派遣軍の増強をすすめ、多国籍軍という形での軍事的抑止と軍事的制裁を主導していったのです。他方国連安保理は、イラクにたいして即時無条件撤退や経済制裁などの諸決議を発しつつ、侵攻前の原状回復を実現する試みを続け、非軍事的和平の取り極めに奔走す

心となつたのは、フランスと旧ソ連でした。アメリカを中心とする多国籍軍の対イラク戦争を回避することが課題でした。しかし不当にもアメリカは、678安保理決議を拡大解釈したうえで、危機を戦争へともつていつたのです。アメリカ国内はもちろん、世界すべてに戦争プロパガンダを浸透させることによって対イラク戦争を遂行したといえるでしょう。フセインの地域覇権という野望を恐れたアラブ諸国も基地をアメリカに提供するという形で協力したし、世界世論も主権国家クエートへの公然たる侵犯と併合という無法かつ重大な事実の前に多国籍軍の軍事行動を受容したといえるでしょう。

さて、一二年前と比較して今日のイラクのおかれた状況は、決定的に異なります。国際的制裁、とくに経済制裁の継続でアラブ諸国の中でも最も弱体化した国家となり、近隣アラブ諸国への軍事的な膨張の恐れも現実には存在しなくなっています。アラブ諸国は、以前とは逆にイラクの崩壊が中東地域の不安定と無秩序を生むと懸念しているほどです。したがつて、アメリカが行う対イラク戦争にも実質的に反対しているのです。

だからこそ、アメリカはイラクにたいして大量破壊兵器保有の罪を声高に叫びながら、主にアルカイダと関連づけた国際テロリズムの罪状で戦争プロパガンダをすすめざるをえなくなつてゐるのです。アメリカの正当性の喪失と平行して、独仏および中露を中心とする対イラク戦争反対の動きは波状的に世界に広がり、急速なテンポで反対世論が展開されているわけです。戦争正当化の喪失を象徴する实体が、「石油のための戦争反対」というスローガンに、また同時に、アメリカのイラク内政への介入と主権侵害が、「ブッシュはヒトラーだ」という糾弾のスローガンとして登場してきています。

四・パクス・アメリカーナ危機について

パクス・アメリカーナをどのよ

うな形で構想するかは、ソ連・東

欧崩壊前後にアメリカがつきつけ

られた最大の課題といわねばなり

ません。一極覇権を構想するのか、

或いは国際コンソーシャム方式を

含む多極覇権を構想するのかとい

う選択です。二〇世紀最後の一〇

年がアメリカに与えた試練でしたが、

新世紀にはいり現ブッシュ政権は

一極覇権の構想を選択しました。

とりわけ二〇〇一年の九・一一事

件を契機として、一国行動主義（ユ

ニラテラリズム）という振舞いで、

世界にその姿をあらわしたわけです。

昨年初の「悪の枢軸」宣言に続

いて、八月には「国防報告」を、

そして九月には「国家安全保障戦略」

を発表しました。そこで示されてゐる一貫した狙いは、「イラクの大量破壊兵器の脅威」から「アメリカの自由と民主主義を守るために核を含む先制攻撃さえ許される」という決議の枠外に自らをおく言動にして既に述べた戦争プロパガンダを繰り返しながら、対イラク戦争準備態勢をすすめています。「国連ローランに、また同時に、アメリカのイラク内政への介入と主権侵害が、「ブッシュはヒトラーだ」という糾弾のスローガンとして登場してきているのです。

一事件に際会し、すでに触れたような「ならず者国家」と国際テロリズムを主敵とする、軍事力に特化した一極霸権体制の道へ踏み込んだというわけです。一転して軍事費を急増させている現状は、必然的に軍拡の経済へとシフトしていくかざるをえません。

つぎに注目したい点は、体制正当性の問題です。米ソ冷戦期ですら反共・自由・民主主義・人権などのイデオロギーを正当化価値として同意の調達に腐心したのですが、いまや「悪の枢軸」と国際テロリズムを大量破壊兵器（核・生物・化学）で結節することによって不安感と恐怖感を、それも底知れぬ心理的恐怖を創出し、それに依つて正当性を確保せざるをえません。

この恐怖の恒常化は、国内の自由民主主義体制を侵蝕することになるでしょうし、政治的矛盾の激化を生み出すことになるでしょう。狂信的なナショナリズムは一刻の麻醉薬的効能しかもちえないものです。では世界における正当性はどうでしょうか。フセインのイラクを主敵とし、国際テロ・アルカイダと結びつける恐怖への反テロ国際統合は、今日すでに同意を調達する機態をそがれています。反対に、ブッシュ・アメリカの中東版としてシャロン・イスラエルが浮上し、両者共通の国家テロと認識されかねない事態を迎えています。

正当性を喪失した軍事的一極霸権体制は、まさに「裸の王様」とならざるをえません。人類普遍の理念と価値を正当原理としてグローバル化できないアメリカのおかれた現実は、「マグマ時計五分前」といえるかも知れません。

五・おわりに

相対化から見えるもの

グローバリゼイションが日常感覚的に受容されているのが世界と日本の現状ですが、三題嘶の落ちとしては、集中・統合期は終焉を迎、分散・自立期に入っている、とみなすことが世界の客観的な現実というわけです。宇宙霸権や一極霸権の構想や試みは、逆流でしかないものです。歴史の本流は、分散・自立期に主体的に対応しうる人類的英知です。画一的な価値を普遍的なものとしてもとめるのではなく、歴史的に形成された地域・社会・個人の多様で多元的な価値の併存を受容する創造的英知です。「文明の衝突」ではなく、文明の差異性を相互に確認し、承認しあえる英知こそが創造的なものと思ひます。わたくしたちの関心的である「東アジアの安全保障」も、地域スケールの生存のあり方、それも主体的なあり方そのものが問われているのかも知れません。

（たまたま りょうすけ
龍谷大学名誉教授 北区在住）

編集後記

イラク特別措置法の延長がきまり、衆議院が解散となりました。この号が出る頃には総選挙の結果も確定しているでしょう。いま新聞もテレビも自民党と民主党の二大政党並立の時期到来の前宣伝で塗りつぶされた観があります。しかし

この総選挙の真の争点は自衛隊のイラク派遣と憲法九条改正問題ではないでしょうか。自民・民主両党ともこの問題での主張は表現の語句がちがうだけで、本質的には同じです。

いまの議員諸氏の大半はすでに戦後生まれで戦争の惨苦を体験していない。彼らの中の「安全保障」族はみな自衛隊海外派遣の推進論者であり、その中から防衛庁長官や野党の内閣の防衛庁長官が出ています。

伊拉克は戦場です。「安全地帯」に派兵するといつても、それは比較的に「安全」というにすぎません。日中戦争の経験でも「安全地帯」とされている所で射撃を受けて戦死した例は少なくありません。アメリカによるイラク攻撃は国連も正当化をこぼむ不正義の戦争です。イラク国民が抵抗するのは当然でしょう。派遣された自衛官が死傷することも予想されます。この派兵が前例となれば米国の要請でもつと激烈な戦場への自衛隊派遣も

ありうるでしょう。その場合の死傷つまり損害は補充せねばなりません。しかし補充に応じて自衛官を志願する若者がどれだけいるでしょうか。そうなると浮かび上がってくるのは徴兵となります。徴兵だけは憲法九条を改悪しなければ絶対にできません。この道理は分かりきったことですが、案外に若者たちに理解されていないよう

です。

戦前の民主運動史のあら筋は、侵略戦争への反対運動が治安維持法体制によって押しつぶされたと特徴づけることができます。今こそ声を大にして、民主運動史の経験を語ろうではありませんか。ドイツでは二割ちかい青年が兵役を拒否しており、それが背景となつてドイツはイラク戦争で米英を批判し、派兵の要請をこぼみつけているのです。

左記へご連絡下さい。

会および会報については、
左記へご連絡下さい。
〔事務局〕

〒六〇六一八一〇七

京都市左京区高野東開町
一一二三 第三住宅

三三一三〇二 井手 幸喜
TEL FAX ○七五—七二二一三八二三
識されかねない事態を迎えています。